

Madoka  
Harumi



**Between**

## Between

デパートと呼ぶには少々おこがましい駅前のショッピングセンターのエレベータは、一面がガラス張りの眺めの良いものだった。明るい日が差し込むそのエレベータボックスに二階から乗り込むと、車椅子の二十歳前後とおぼしき男性が乗っていた。最上階の『6』のボタンを押そうとしたらすでにランプがついていたので、美奈は『閉』ボタンを押してそのままドアの脇に立つ。すると上昇したエレベータは四階で停止し、黒光りするランドセルを背負った小学生の男の子が乗ってきた。男の子はタタタッと窓際まで駆けた。ほかに乗ってくる人はいなくて、美奈はまた『閉』ボタンを押す。そしてエレベータは再び上昇を始め、がくんとひと揺れして止まった。五階と六階の間だった。

あれ？ 思わず声を上げた美奈は、くるりと振り返った。止まっちゃいましたね。車椅子の男性の穏やかな声に、心強さを感じて美奈は頷いた。小学生の男の子が美奈と車椅子の男性を不安気に見ている。止まっちゃったの？ ここは大人の私がしっかりしなくてはと美奈は笑顔を作る。うん、止まっちゃったみたい。

車椅子の男性が、落ち着いた様子で車椅子用のパネルの一番下にある非常ボタンを押した。電気系統の故障らしく、すぐに対処してくれるとの返事があった。

けっして広くはないエレベータボックスに沈黙が落ちる。気まずい。顔を上げた美奈は少年と目が合って、次に男性と目が合って、あることに気がついた。

「視線の高さが同じですね」

おねーさん身長何センチなの？ 表情を幾分か和らげた少年に訊かれ、一四八センチと答えた。僕とあまり変わらないや、なんて言葉はちょっと突き刺さる。童顔を隠すように化粧をして、香水をふりまいて、ネイルサロンに行って、ファッション雑誌に載っているような服を揃えて。ここまでやらないと年相応に見られない自分が少し悲しい。

訊くと、少年の身長は一四六センチだそうだ。車椅子の男性に訊かれ、五年生、と元気よく答える。車椅子の男性は足がすらつと長いので立てればそれなりの身長になりそうだが、車椅子の目線の高さは美奈と少年と変わらなかった。

少年のランドセルには、体操着袋がぶらさがっていた。『文月航平』と油性ペンで書かれていて、プリントされている学校名に美奈は声を上げた。美奈の出身小学校だ。美奈が覚えている先生の名前を上げていくと、三番目に上げた『段先生』という名前に航平の目が丸くなる。

「いるいる！ ダンナスキー！」

うわっ、本当に？ あだ名まで変わってなくて、美奈のテンションも上がってしまう。

『ダンナスキー』ってなんですか？ という車椅子の男性の問いに答えた。

「段先生って女性の先生なんですけど、旦那さんがどこかの大学の有名な教授らしいですよ。遺伝子工学で有名だったかな？ 授業中に自分の旦那がいかにすごかって話ばかりするんで、旦那好きの段先生で、『ダンナスキー』」

うちのケイジさんがガツカいで表彰されたんですヨ。航平くんの段先生の口真似は美奈の中にあつた古い記憶そのまま、ノスタルジーも相まって声を上げて笑ってしまう。

遺伝子工学の段先生って、もしかして段教授のことかなあ……。と、笑い転げている美奈と航平とは対称的に、車椅子の男性が冷静な口調でコメントした。知ってるんですか？

「多分、段圭司教授です。うちの大学の先生ですよ。有名な方です」

大学生なんですか？ 訊いた美奈に、男性は頷いた。えっとその……と言葉を詰ませた美奈に、男性は「村上です」と名乗った。あ、私は中井美奈です。

「村上さんも、遺伝子工学を学んでるんですか？」

僕はしがいない文学部です。あ、私も文学部ですよ。今年の春に卒業しちゃいましたけど。

会話に置いていかれていた航平が、ねえねえと村上に声をかけた。

「大学生って、アルバイトできるの？」

そりゃもちろん。村上の答えに航平はいいなあと目を輝かせた。アルバイトしたいの？

「お母さんが一人で働いてて、その、大変そうだから」

おお。美奈と村上は揃って感嘆のため息をついた。できた小学生だ。

「偉いなあ。うちのバイト先に本当に使えない奴がいるから、代わってほしいくらいだよ」

褒められてまんざらでもない様子の航平が、どんな風に使えないの？ と身を乗り出す。

「本の整頓もできない、棚に手が届かないってだけで大騒ぎ、挙句の果てに兄貴が年中様子を見に来る。『緑谷の兄です、妹がいつもお世話になってます、不器用な奴ですがよろしく願います』て、そう毎回挨拶されても、ねえ」

それは確かに、ねえ。美奈は苦笑を村上に返した。

「本ってことは、アルバイト、本屋なんですか？」

村上は駅前の本屋の名前を挙げた。本屋いいですね。私も本好きなんですけど、お金がないんで図書館に行っちゃいます。

ぱつと航平が手を上げた。「僕も図書館によく行くよ。国道沿いの市立図書館！」

「じゃ、すれ違ってるかもね。私は図書館に行きすぎて、司書のおばちゃんとお喋りするようになっちゃった。この間も旅行のガイドブック探してたら話し込んだりして、『今の若い子はゲームだなんだって引きこもってばかりでやんなっちゃう』って。話を聞いたら、ご自身が旅行に行きたくて悶々としているらしくて」

旅行、いいですね。なんて言われていえいえと首を振る。近場の伊豆の温泉です。

「村上さんは旅行とか行かないんですか？」

言ってから車椅子を見て、しまったと後悔した。そんな美奈を見透かしたように、村上は苦笑を浮かべる。この足なので、どうも億劫で。なんと返してよいのかわからず黙ってしまった。航平も気まずそうに視線を伏せている。すると、暗い雰囲気になってしまっすみません、と村上が謝った。いえ、こちらこそすみません。美奈も頭を下げる。

「こういうときに笑えればいいんですけど、ダメですね。実は、ずっと付き合っていた彼女にも、ちょっと前に別れてくれって言ってしまったばかりなんです」

なんて、話されても困りますよね。美奈はぶんぶん頭を振った。彼女はなんて？

「僕の足の分まで支えたいと。でも、お荷物になるからと断ってしまいました」

航平は大人の話には口を出すまいと思っているのか、口を硬く結んでいた。一方の美奈は視線を右往左往させて言葉を探す。そのあと、彼女とは？

「そのあとは、会いに行っていない」

がくんと足元が揺れて、村上の車椅子が動いた。ずっと止まっていた窓外の景色が流れている。エレベータボックスが最上階、六階に到着した。

じゃあねっ。大人たちに手を振って、航平は真っ先にエレベータボックスを飛び出した。もともと行こうと思っていたゲームコーナーの脇を通過し、エスカレータを駆け降りる。新しいゲームの下見はやめて、母が働いている図書館へ行くことに決めた。

旅行なんて面倒だしいいよ。毎日仕事で疲れて帰宅する母の提案に、昨日はそう返してしまった。航平なりに気を遣った結果の返事だった。けど。

やっぱり行きたいって言うてみよう。

ショッピングセンターを駆け出た。澄みきった秋の空には、雲一つ浮かんでいなかった。

エレベータボックスから出る際、美奈が車椅子を押してくれた。すみません、と振り返って頭を下げた村上に、いえいえ、と美奈は花咲くように笑んだ。航平がさっさといなくなってしまったので、エレベータホールにぽつんと二人取り残されたようになる。

あの。遠慮したような美奈の言葉に村上は再び振り返った。お節介なのは承知ですが。

「彼女の気持ちを知りたくて車椅子借りるくらいなら、さっさと会いに行けばいいんじゃないですか？」

ぽかんと口を開けた村上に、美奈は追い討ちをかける。間違っていないですよね？

美奈の勝ち誇ったいたずらっ子のような視線に負け、村上は破顔して立ち上がった。数時間ぶりに踏んだ硬い床は、スニーカーのゴム底越しなのにひどく懐かしくて頼もしい。

「どうしてわかったんですか？」

「エレベータに乗るときって、普通は車椅子のブレーキかけますよね？ さっきエレベータが動いたとき、車椅子が動いたから変だなって。それに、村上さん、そのとき咄嗟に右足を床につけてましたよ」

そりゃダメだな。苦笑した村上に、あと、と美奈は言葉を続けた。

「最後の『会いに行っていない』って言葉。会いに行っていないのは、彼女じゃなくて村上さんじゃないかと思って」

美奈はいくぶんか真面目な表情になって、村上を見た。

「こんなに想ってもらえるなんて、彼女幸せですよ」

そうですかね。村上の問いに美奈が大きく首肯した。鼻腔の奥がつんとしたのを隠すように、村上はありがとうと美奈に頭を下げた。

村上もいなくなり、一人きりになったエレベータホールで美奈は携帯電話を取り出した。この階にあるカフェの、ジャンボパフェ百円引きのクーポンを表示する。カロリーを考えたら死んでしまいそうなこのパフェを食べるのは、やけ喰いしたいとき限定である。

いい金づるでもあった年上の彼氏を切ってまで手に入れた一つ年下の彼。その彼が、駅前の本屋で若い女の子といちゃついているのを見かけたのが昨日。

二股なら因果応報だと笑えたかもしれないけど、まさか妹だったとは。

アドレス帳で『緑谷』の名前を探し、素早く消去した。シスコンなんてまっぴらだ。

旅行、申し込み金を払う前でよかったー。なんて思いつつ、村上のことを思い出す。目尻の笑い皺が印象的な、優しそうな顔だった。真面目で誠実そうで、あぁいうタイプは二番目でもいいって言うても相手にしてくれないんだろうなあ。

美奈はステップを踏むようにエレベータホールから歩きだす。私の王子様はどこかしら。

〈完〉

パプー公開版 2013/5/29

晴海まどか 著